

## 現代青年の友人関係と開示対象の使い分けについて

岡田努  
(金沢大学 人文学類)  
okdtm@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

### 問題と目的

現代の青年の友人関係については、互いに傷つけ合うことを避け、表面的な関わりに終始する傾向が指摘されている。

一方、福重(2006)、浅野(2006)、岩田(2006)は社会学の立場から、現代青年の友人関係は場面や遊ぶ内容によってつきあいを使い分ける「選択化」が進行していると論じている。こうした「選択化」の背景には、現代社会においては、個人の内面を深く開示し合うような親密さについての図式が解体したこと、またただ一つの一貫した自分をもつという規範が崩れたことを挙げている。

また選択化と並行して、相手や場面に応じて自己のあり方を切り替える能力が高まっているとしている。さらに、現代青年において自己喪失感や自己拡散の高まりは見られないことから、自己の多元化は、自己の未熟さとは結びつかないとしている。

たしかに、選択化・多元化は言い換えれば多様な社会的サポート源をもつことにつながり、適応を促進するとも考えられる。しかし、対人関係の選択化・多元化と青年の友人関係のあり方、適応との関係について心理学的な詳細な検討はこれまで行われてきていない。本研究はこの点について実証的に検討する試みである。

### 方法

[調査時期]2007年6～7月

[回答者]関東、中部、北陸地方の4年制大学学生403名(男性152名、女性249名、不明2名)1～5年、年齢18～31歳(25歳までで99.5%)

[尺度]以下の尺度項目を用いた。

**1)友人関係** 現代青年の友人関係の特徴に関する尺度(岡田,2005)を用いた。自己閉鎖(本当の気持ちは話さない など)、軽躁的關係(友だちと一緒に騒ぐ など)、侵入回避(友だちの内面に土足で踏み込まないようにする など)、傷つけられることの回避(友だちから傷つけられないようにふるまう など)の下位尺度をもつ。

**2)自己の使い分け** 榎本(1997)が作成した自己開示尺度ESDQ高校・大学生用より、以下の自己のカテゴリーについての42側面についてそれぞれ父、母、兄弟姉妹、最も親しい同性の友人、最も親しい異性の友人、恋人、一般的な同性の友人、一般的な異性の友人、先生、ブログなどネット上の相手について、自己を開示する場合に選択してもらった。

自己の側面は以下の通りである。精神的自己、身体的自己、社会的自己、物質的自己、血縁的自己、実存的自己、趣味、意見、うわさ話。

**3)自尊心** Rosenberg(1965)、山本・松井・山成(1982)訳を用いた。

### 結果

友人関係尺度の下位尺度ごとおよび自尊心尺度について合成得点を求めた。また自己開示の内容と対象に基づき以下の操作によって、内容と対象の多元性指標を算出した。すなわち、回答者個々に、開示内容×対象のマトリクスに基づいた個人内コレスポネンス分析を行い、第1軸のイナーシャの寄与率を1から減じた値をもって、多元性の指標とした(これはDonahue,Robins,Roberts,John(1993)の役割アイデンティティの分化度指標(SCD)の算出方法に倣ったものである。Donahueらは、個人内主成分分析によって、1-第1主成分の分散を求めていたが、本研究では1,0データを用いているため、コレスポネンス分析を行い、イナーシャの寄与率に基づいた指標を用いた)。

友人関係尺度の下位尺度得点を投入変数としてWard法によるクラスタ分析の結果、以下の3クラスタが得られた。第1クラスタ(n=152)「自己閉鎖」の標準得点が正、「軽躁的關係」が負の「対人距離群」。第2クラスタ(n=160)「自己閉鎖」が負、「軽躁的關係」が正の「軽躁群」。第3クラスタ(n=78)投入変数すべてについて正の値を取るが、そのうち「侵入回避」が特に高い「防衛群」。

多元性指標の平均順位をクラスタ間でKruskal Wallis検定によって比較したところ $\chi^2=9.16(p<.05)$ で有意となり、多重比較の結果、第1クラスタが他よりも低かった。また自尊心の平均値をクラスタ間で分散分析により検討したところ、 $F=12.03(p<.01)$ で有意となり、多重比較の結果、第2クラスタが他の群よりも高かった(Table 1)。

Table 1 クラスタ間での多元性指標の値

群	n	多元性指標			自尊心		
		平均値	SD	平均順位	n	平均値	SD
1 対人距離群	150	.544	.205	171.25	151	30.71	7.15
2 軽躁群	158	.605	.144	204.21	159	34.29	6.59
3 防衛群	76	.601	.179	210.09	78	30.51	8.45

また多元性と友人関係、自尊心の間で相関を求めたところ、 $r=.144(p<.01)$ と弱い相関関係が見られた(Table 2)。

Table 2 分化度と各尺度得点の相関

自己閉鎖	軽躁的關係	侵入回避	傷つけられ回避	自尊心
-.217**	.204**	-.018	.059	.144**

\*\*: $p<.01$

### 考察

「対人距離群」は自己開示する相手や場面についての多元性が低く狭い範囲での対人関係に留まる一方、「軽躁群」「防衛群」では開示内容によって広範囲に相手を使い分けていた。外向的で社交的な「軽躁群」だけでなく、相手から侵入されることを避けたがる「防衛群」においても多元性が見られたことは、社会学からの指摘にあるように、その場に適切な自分を演出し自分が傷つくことを防衛する傾向の現れと考えられる。一方、自尊心についてみると、「防衛群」は「対人距離群」とともに自尊心は低かった。すなわち選択的・多元的な対人関係が防衛的に用いられる場合は必ずしも適応を促進しないことが示唆される。

多元性と自尊心との相関からは、弱い関連が見られた。多元的な関係を結べるということは、言い換えればソーシャルサポートにおけるサポート源を豊富にもつとも言え、その意味では適応的であるとも考えられる。

註:本研究は第37回(平成18年度)三菱財団社会福祉事業・研究助成「青少年のキャリア意識形成と自己意識の発達促進に関する基礎研究」(岡田努・榎本博明・下村英雄・山浦一保)によるデータの一部である。

### 引用文献

浅野智彦(2006).若者の現在 浅野智彦(編)検証・若者の変貌:失われた10年の後に 勁草書房 pp.233-260.

Donahue,E.M.,Robins,R.W.Roberts,B.W.,John,O.P.(1993).The divided self: concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of personality and social psychology*. 64,834-846.

榎本博明(1997).自己開示の心理学的研究 北大路書房

福重清(2006).若者の友人関係はどうなっているのか 浅野智彦(編)検証・若者の変貌:失われた10年の後に 勁草書房 pp.115-150.

岩田考(2006).若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野智彦(編)検証・若者の変貌:失われた10年の後に 勁草書房 pp.151-189.

岡田努(2005).現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究.金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇 25,15-32.

Rosenberg,M. (1965). *Society and the adolescent self-image*.Princeton:Princeton University Press.

山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982).認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30,64-68.